

4. 東日本大震災に対する当院の対応状況

東日本大震災関係シンポジウム 「大震災後の医療・診療・感染症防止を考える」を開催

9月29日、東日本大震災関係シンポジウム「大震災後の医療・診療・感染症防止を考える」を百周年時計台記念館 百周年記念ホールにて開催しました。同シンポジウムは、当院及び医学研究科が、東日本大震災発生直後より行ってきた被災地等への様々な医療支援活動について、一般の方々に広く報告することを目的として開催したもので、当日は、学内外から120名余りの参加がありました。

シンポジウムでは、坂田隆造副院長より「京都大学における医療支援体制」について講演が行われた後、大鶴繁先生（京大病院 救急部 助教）より「災害派遣医療チーム（DMAT）による支援」について、三上芳喜先生（京大病院 病理診断部 准教授）より「検死医としての活動」について、石井和樹さん（医学部 人間健康科学科 4年生）より



坂田副院長による講演

「東松島におけるボランティア活動から」について、山崎信幸先生（京大病院 デイ・ケア診療部 院内講師）より「福島県における「京都府心のケアチーム」の活動」について、濱西潤三先生（京大病院 産科婦人科 助教）より「宮城県石巻赤十字病院への産婦人科医師派遣に参加して」について、村中弘之先生（京大病院 心臓血管外科 助教）より「近畿ブロック4大学による医療支援」について、高倉俊二先生（京大病院 感染制御部 准教授）より「被災地における感染症防止」について一般公演が行われました。引き続き、小池薫先生（京大病院 救急部 教授）より「福島第一原子力発電所の事故を踏まえた今後の緊急被ばく医療」について特別講演が行われました。最後に、坂田隆造副院長より「今後の被災地への医療支援」について講演が行われました。



小池先生による特別講演

東日本大震災シンポジウム「大震災後の医療・診療・感染症防止を考える」 副院長/心臓血管外科 教授・診療科長/坂田隆造



さる9月29日、百周年記念ホールで表題シンポジウムが開催されました。京都大学シンポジウムシリーズ「大震災後を考える」の一環で第11回目のテーマは医療でした。

京大病院及び医学研究科では3月11日の発災直後にDMATを派遣、それ以後も医療支援を継続してきました。検死医派遣、「京都府心のケアチーム」と日本産婦人科学会の「産婦人科医師派遣」活動への参加、「近畿ブロック4大学（京大、阪大、滋賀医大、福井大）連携による医療支援、など状況の変化に応じて移り変わる医療支援要請に継続的に対応してきました。

派遣した職種は多岐にわたり診療科も数多く参加しました。例えば近畿ブロック4大学の医療支援は、1チーム6名（医師2、看護師2、薬剤師1、事務職員1）の編成で7月下旬までに宮城県石巻市で3チーム計18日の活動を行い、時の経過とともに要望が高まっていった「心のケアチーム」も3名（医師、看護師、精神保健福祉士）編成で、7月下旬までに8回、延べ47日間福島県会津美里町で医療支援を継続しました。原発関係では緊急時被

ばくスクリーニング、福島第一原発「緊急医療室」での活動目的の派遣もありました。9月上旬まで、京大病院として計23チーム、57名の職員が大震災後の医療支援活動に積極的に参加してくれたこととなります。

シンポジウムではこれらの中の5チームと学生のボランティア活動、計6チームの活動報告があり、災害時の医療支援活動の重要さと、今後の課題が討論されました。最後に救急部の小池薫教授より、「今後の緊急被ばく医療」と題して講演があり、原発事故の特異な重大性と京都府の緊急被ばく医療体制の現状が解説されました。

今回の一連の医療支援活動で学んだ執行部の第一の反省は、支援要請を「待ち」の姿勢で備え、初動が遅れたことでした。恐らくもっと多くの職員が自発的な支援活動を思いながら日常業務の制約のなかで日々が過ぎゆく無念をかみしめたと考えますが、これらの意志をくみ上げ、支援活動ができる仕組みをいち早く立ち上げることが今後の課題でしょう。

とは言え、医療支援は長期に要請されます。京大病院では今後も被災地への医療支援を継続していきます。これまでのご支援に心より感謝申し上げますとともに、今後も息の長い活動を支えて下さいますようお願い申し上げます。